

平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【宮城県】

1 実践テーマ	【 IV 】
2 実施対象者	登米市立北方小学校 第4学年（男子16名、女子19名、計35名）
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名（総合的な学習の時間） ② 行事名（ ） ③ その他（インドネシア・アチェ州 SD43小学校との交流） (2) 地域における活動 ① イベント名（ ） ② その他（ ）
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他国の文化や生活の様子を知ることを通して、自国の生活との違いを実感し他国やその人の魅力を発見する。</li> <li>・自国の文化や生活の様子を他国人の人に知ってもらうことを通して、自国や自分自身の魅力を再発見する。</li> </ul>
5 取組内容	1 身近な地域の魅力を探る。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちが住む登米市北方地区の良いところを出し合い、他国の友達に伝えたいことを抽出して調べ学習をした。今回は「長沼について」「北方神楽について」「登米市のお米について」「郷土料理『はっと』について」の4点で実施した。</li> <li>・他国の友達に伝えるということを前提に、分かりやすく発表できるようにまとめた。</li> <li>・交流はインターネット通話（Skype）を使用することを前提に、分かりやすい写真資料の準備、簡潔な言葉を用いた発表原稿の準備を行った。</li> </ul> 2 インドネシア・アチェ州について知る（9月12日） 活動名「アチェのことを知ろう」 講師：宮城県教育庁生涯学習課 社会教育支援班 課長補佐（社会教育主事） 蛭名 博人 氏 東松島みらいとし機構 伊東和希子 氏 <ul style="list-style-type: none"> <li>・お二人の講師をお招きし、インドネシア・アチェ州の様子について、衣・食・住をテーマに写真を交えて教えていただいた。</li> <li>・日本の生活の様子とインドネシアの生活の様子の違いについて知り、実際にインドネシアの小学生と交流したときに質問したいこ</li> </ul>

とを具体的に考えるきっかけとした。



### 3 アチェ州 SD43小学校との交流（9月18日）

参加者：北方小学校4年生児童（35名）

アチェ SD43小学校4年生児童（40名）

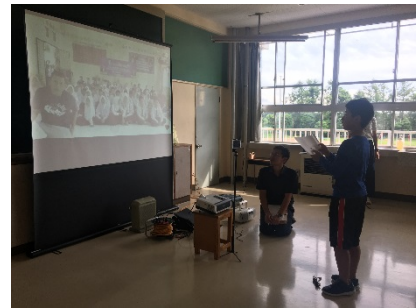
<コーディネーター>

NPO地球対話ラボ 理事 中川氏

アチェ側協力者 ハナフィ氏

震災復興学生ボランティアハマヒルガオ Ambassador  
畠山氏・佐竹氏・宮崎氏

・インターネット通話（Skype）を使用し，交流を実施した。



### 4 アチェ州からの訪問団との交流（10月3日）

参加者：北方小学校4年生児童（35名）

アチェからの訪問団 トミー氏，ヌル氏，ティティ氏

NPO地球対話ラボ 理事 中川氏

東北大大学院 通訳担当者 アンディ氏

震災復興学生ボランティアハマヒルガオ Ambassador  
畠山氏



### 5 アチェ SD43小学校児童との絵による交流

- ・一人一人の将来の夢をイラストで描かせ，SD43小学校児童に送った。
- ・SD43小学校からも同様に絵が送られ，互いに将来の夢について交流した。

### 6 主な成果

- ・身近な地域の文化等について学習してまとめたことを他国に伝える活動を通して，身近な地域の良さに改めて気付かせることができた。
- ・言語の違う相手と通訳を間に入れて交流する体験をしたことで，伝

	<p>えたいことを正確に伝えるために、明瞭・簡潔に話すことに気付かせることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>他国との交流を通じた感想文から、異文化に触れたことによる驚きや喜びが大きかったことが読み取れた。</li> </ul>
7実践において工夫した点 (事業の特色)	<ul style="list-style-type: none"> <li>交流先であるインドネシア・アチェ州についての予備知識を得るために、アチェ州への訪問経験のある講師の方に来ていただき、具体的なアチェ州についての学習の場を設定した。</li> <li>よりの確に発表内容を伝えるため、Skype 交流の事前に現地の協力者に発表原稿を送付して翻訳を依頼した。</li> <li>インドネシアをより身近に感じさせるため、日本への訪問団を招いて実際のインドネシア人との交流を設定した。</li> <li>将来の夢の交流を行うことで、他国の子供たちが思い描く夢と自分たちの夢との違いに気付かせた。</li> </ul>
8主な課題等	<ul style="list-style-type: none"> <li>交流先の学校選定、通信機器の手配や準備等について、NPO 地球対話ラボ、震災復興ボランティアハマヒルガオ Ambassador からの協力が不可欠であった。そのような協力者との人脈を持つ教員があればこそその活動であるがゆえに、学校として持続可能な交流活動にするための年間指導計画への位置付け、協力者との連携が必要である。</li> <li>より充実した国際交流にするために、相手国についての事前学習の質を高める必要がある。</li> </ul>
9来年度以降 の実施予定	<ul style="list-style-type: none"> <li>年間指導計画に位置付け、来年度以降も継続して交流を続けていく。</li> </ul>